

琉球古文献におけるイ列乙類音対応音の表記
について

佐藤, 清 / SATO, Kiyoshi

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

333

(終了ページ / End Page)

271

(発行年 / Year)

1987-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002724>

琉球古文献における

イ列乙類音対応音の表記について

佐藤 清

第一章 問題の所在と研究の目的

第二章 研究の方法と資料

第三章 イ列乙類音対応音の表記の実態

第四章 音韻対応法則の例外について

第一章 問題の所在と研究の目的

奈良朝中央方言のイ列乙類音の琉球方言への対応について、有坂秀世氏は「母音交替の法則について」(『音声学協会会報』三四号)の中で、次の指摘をおこなった。

ついでに言ふ。現代の琉球首里方言では、乙類のキのうち、ウ列音と交替するものに相当する所には

tsi:hi (月) ツキ——ツクヨ (月夜)

sji:ng (過) スギ——スクス (過)

uchi (内) ウチ——ウツモモ (内股)

kuchi (口) クチ——クツバミ (銜)

のやうに口蓋音があらはれ、これに対して、乙類のオ列音と交替するものに相当する所には

ki (木) キ——コダチ (木立)

uki:ng (起) オキ——オコス (起)

uti:ng (落) オチ——オトス (落)

のやうに非口蓋音があらはれてゐるやうであるが、果して偶然であらうか。専門家の御教示を仰ぎたい所である。「おもろさうし」や古代の金石文で、ウチ(内)クチ(口)カミ(神)などの

末尾の音節はいづれもイ列の仮名で写されてゐるのに、キ(木)オリ(木)などは到る処ケ、オレとなつてゐて、キ、オリとなつてゐる所は殆ど見当らない。(もつとも樟などはクスヌキとなつてゐる。)これらも、素人考へに過ぎないかも知れないが、ちよつと注意を惹く所である。ウ列と交替するイ列乙類と、オ列乙類と交替するイ列乙類とは、極めて古い時代には音韻上区別されてゐたものではなからうかとも疑はれる。

氏はこの論文を収めた『国語音韻史の研究』(1944明世堂)の「後記」で、さらに次のとおり付け加えた。

なほ、「下りて」に相当する琉球語動詞は、(y:hiではなくて)hi:hiである。これも「おもろさうし」の「おれて」の系統の形をそのまま伝へてゐるものと見える。(オ列と交替するイ列に対応する琉球語母音は、仮名書きに表れてゐる通り、一度は恐らく一般エ列母音に合流してゐたものであらう。

有坂氏の考察は「ついでに言」われたためか、琉球方言研究者の注目するところとなつていないけれども慧眼と評すべきものである。

その後、服部四郎氏は琉球方言のほかに、八丈島・九州そして奈良朝東国方言を視野にふくめ、これら諸方言と奈良朝中央方言のイ列乙類の対応を日本祖語に二重母音をたてることによつて、次のとおり説明した。



**o* は奈良朝中央方言の乙類のオ列母音に対応する日本祖語の母音の服部氏の推定音価。本論では音価は考察の対象外とするので、乙類のオ列母音に対応する祖語の母音は **o* で表す。ゆえに服部氏の **ai* は私の表記では **oi* となる。

さて、有坂氏がしめした例は断片的であり、服部氏は琉球方言については、もっぱら現代方言と朝鮮語資料をもとに考察を進めている。さらに服部氏の理論を承けた研究を名嘉真三成氏がおこなっているけれども、氏の研究もまた現代琉球方言を中心にしたものである。

そこで私は本論において、仮名をもちいて琉球方言を写した古文獻の表記にも、この音韻対応の法則が反映していることを述べてみたい。すなわち、

琉球の古文獻において、奈良朝中央方言のイ列乙類音に対応する音は、母音が日本祖語 **i:* にさかのぼるものはイ列の仮名で表記し、**oi* にさかのぼるものはエ列の仮名で表記してある

ことを明らかにし、さらにそこから導きだせるいくつかの問題を考察しよう、というのが本論の目的

である。次章にその目的を達成するための方法と資料をしめす。

第二章 研究の方法と資料

琉球の古文獻に対応形が現れる、イ列乙類の音節をもつ単語を次の三種類に分けてしめす。

- I ウ列音と交替
- II オ列乙類音と交替
- III 交替形不明

I と II は交替形とともに掲げる。動詞は連用形でしめす。それは、上二段活用動詞の連用形活用語尾にイ列乙類音が現れるからであり、またいわゆる「動詞連用形の転成名詞」との重出をさけるためである。甲類の音節にはキ、ケ、コのごとく右線を、乙類の音節には、キ、ケ、コのごとく左線を施した。本文は「古事記」は日本思想大系、「日本書紀」は大野晋「上代仮名遣の研究」(1953 岩波書店)、「続日本紀宣命」は北川和秀編「続日本紀宣命 校本・総索引」(1982 吉川弘文館)、ほかは一般に日本古典文学大系をもちいた。

そして、そのイ列乙類音をふくむ単語の琉球方言の対応形が、古文獻においていかに表記してあるかを検証して行くことにする。

調査の対象とした琉球方言の文献資料は以下のとおり。

☆金石文 「たまおとんのひのもん」(一五〇二年)「石門之東之碑文(國王頌德碑)」(一五二三年)「石門の西のひのもん(真珠湊碑文)」(一五二三年)「崇元寺之前東之碑うらの文」(一五二七年)「かたはなの碑おもての文」(一五四三年)「添継御門の南のひのもん」(一五四六年)「やらさもりくすくの碑おもての文うらの文」(一五五四年)「浦添城の前の碑おもての文」(一五九七年)「ようとのひのもん」(一六〇九年)「本覚山碑文」(一六二四年)本文 多和田真一郎「碑文にみる沖縄語」(「琉球の方言」8 法政大学沖縄文化研究所)

☆歌謡集 「おもしろさうし」△略称オモロ▽(第一回編集△巻一▽一五三一年、第二回編集△巻二▽一六一三年、第三回編集△巻三▽巻二▽一六三三年) 多くのオモロには節名が付いているけれども、節名は成立・表記法・語義いずれにも不明の点が多いので、調査の対象からはずした。本文 仲原善忠・外間守善編「校本おもしろさうし」(1965 角川書店) 用例の所在は、巻番号を漢数字、オモロの一連番号を算用数字でしめした。解釈は原則として、外間守善・西郷信綱校注「おもしろさうし」(日本思想大系)△略称「大系本」▽1982・8刷によった。

☆久米島古文書 「久米仲里旧記」△略称「仲里旧記」▽(二七〇六年前後)「君南風由来并位階且公事」△略称「君南風由来」▽(一六九七年から一七〇六年の間)「久米具志川間切旧記」△略称「具志川旧記」▽(一七四三年)本文 沖縄久米島調査委員会編「沖縄久米島 資料編」1983 弘文堂
☆辞書 「混効験集」(一七二一年)本文 外間守善編著「混効験集 校本と研究」1970 角川書店

一口に琉球方言と言っても、その内部においてきわめて複雑な方言差が存在する。しかし、右に挙げた文献は久米島古文書以外は琉球王国の標準語だった首里方言を反映したものである。そして現代久米島方言は首里方言の属する沖縄本島南部方言にふくめるのが一般なので、久米島古文書を資料として同列にあつかうことに問題はないと考える。

それでは愈々これら琉球の古文書において、イ列乙類音の対応音がいかに表記してあるかを検証して行くことにしよう。

第三章 イ列乙類音の対応音の表記の実態

Ⅰウ列音と交替するイ列乙類音の対応例

△ツキ(月) —— ツクヨ(月夜) 都紀(記歌28) 都久欲(万4489)
つきのかす(月の数)(オモロ二46) つき(月)(オモロ五286) おつききやなし おつき月

天の事(混効験集・乾乾坤)

「おつききやなし」の「きやなし」は、外間守善氏によれば、「かなし」ともいわれ、後世、加那志の字が当てられているが、原義は、いとおしい、かわいいの愛^なしである。転じて接尾敬称辞となる。³ということである。

△スギ〔過〕——スグシ〔過〕 須疑(記歌58) 周具斯(万80)

【本覚山碑文】にみえる

御すきりめしよわちや事〔御逝去なさったので〕

の「御すきり」を仲原善忠氏は、「王、王妃等の死去をさす。お過ぎの意か。」とする。「すきり」は△運用形十居り√の複合形式によって、ラ行四段活用化した語形である。

△クシ〔櫛〕——クスヌキ〔串拔〕 梳櫛久志(新撰字鏡⁵) 串クス(東大寺諷誦文稿)

さしくせ(オモロ十534)

【おもしろさうし辞典・総索引 第二版⁶】(以下)【おもしろ辞典】と略す)は、「さしくせ」を「差し櫛」 髪に挿す櫛。「くせ」は「くし」のおもしろ表記。とする。「おもしろ表記」とは「国語的仮名遣いと表音的仮名遣いの摩擦の中で、国語的仮名遣いを表記法の規範にしようとする規範意識が強く働いて、婿を「もこ」、国を「こに」と書くようないき過ぎた類推表記⁷のこと。

櫛の日本祖語形は *kusini のはずだから、「くせ」は対応の例外例ということになる。その説明に当り、【おもしろ辞典】の「おもしろ表記」という考え方も一案である。しかし、表記を尊重した解釈を求める時、注目すべきは高橋俊三氏の見解だ。氏は卷十二705オモロの「はねさしやり、くせさしやり」の「くせ」が「くせささね(奇せ差羽・羽毛で作った神女の髪飾り)」の意であることを根拠にして、「さしくせ」を「差し奇せ(神女の髪飾り)」と解釈した。この高橋説にしたがいたい。

△ウチ〔内〕——ウツモモ〔内股〕 宇知(万3926) 股宇豆毛、(新撰字鏡)

うちほか〔内外〕(浦添城の前の碑おもての文) うち〔内〕(本覚山碑文) きやのうちみや

〔京の内庭〕(オモロ一19) おぎもうち〔御肝内〕(オモロ三92) おちはしろ〔内柱〕(具志川

旧記122) おち桁〔内桁〕(具志川旧記123) きやのうちみやに 御城内にきやうのうちと云御

嶽有(混効験集・坤乾坤)

△クチ〔口〕——クツバミ〔銜〕 久知(記歌12) 鍾久都波美(和名抄⁹)

あきりぐち(オモロ一29)

【大系本】は「あきり口 ニライからの上がり口で、与那原の意であろう。」とする。

はやめよくち〔早滯口〕(オモロ三97) 井くち神〔井口神〕(仲里旧記150) こかねくち〔黄金

口〕(君南風由来146) こかねくち 津口の事なり(混効験集・乾乾坤)

△サビ〔錆〕——サブシ〔淋〕 古記云。生レ澁。謂著一佐婢一也。(令集解卷卅管繕令) 佐

夫斯久(万795)

佐婢の婢は甲類のビの仮名だけれども、『時代別国語大辞典 上代編』の「さぶ〔洪〕」の項が「同書にはいま一例『綻断富己呂婢絶』もあり、甲乙混同後の表記としていまは仮名遣の差は無視してよからう。」とするのに従う。【おもしろさうし】に次の例がある。

きりさへ・かうさび(三97) ちりさび・かうさび(五242) ちりさひ(廿二1508)

『おもしろ辞典』の「きりーさへ(塵錆)」の項は「刀の錆のことらしい」とし、「かうーさび(粉錆)」の項は「泥のこと。」「かう」は粉(コウ)、泥の粉のこと。」「さび」は錆色。五―二四二の「かうさび」は稲の病菌のことであろう。三―一九七は刀の錆の意らしい。」となっている。又「ちりーさび(塵錆)」の項には「塵のこと。」「さび」は、稲の葉につく錆色の菌をいう。稲の病菌のことらしい。」とある。「きりさへ」は「ちりさび」の誤写だとする服部四郎氏の説¹⁰⁾を支持する。

『久米仲里旧記』には「さばい」という言葉がみえる。

あかさばい (252) あふさばい (2436) ふくさはい (2185)

外間守善氏の「久米島古語解釈の素描」(『沖繩久米島の総合的研究』法政大学百周年記念久米島調査委員会編弘文堂)には、次の説明がある。

あかさばい 赤錆。稲の葉についた錆色の斑点。病菌である。オモロ語には「かうさび」、「きりさへ」、「ちりさび」がある。

あふさばい 青錆。稲に付く病菌。

ふくさはい ふく錆。稲に付く黴菌。「さはい」は「さび」の表記で、実際には稲の病菌をさす。外間氏は「さび」と「さばい」を同語とするけれども、次の理由から、この二語は別語とみるべきだと思う。

現代首里方言を記録した『沖繩語辞典』¹¹⁾には次の二語がみえる。

sabi^① (名) 錆。

sabee^① (名) ①害虫の名。作物の葉・莖などに密集して付く小さい虫。油虫。ありまき。(後略)

sabi は「xβ」に、sabee は「səβei」に対応する語形だ。「ばい」は e の長音表記。『沖繩語辞典』に「see^①(名)ばった。いなない。」と見える語を『久米仲里旧記』では「さい」(201)と表記している。

九州方言には次のとおり、sabee に対応する言葉がみえる。

サ|ベ|ー サ|ビ|ャ|ーに同じ。稲の病気(有働駒雄『天草の方言』)

さ|べ|ーい【名】ウンカ(浮塵子)(佐賀県教育会編纂『佐賀県方言辞典』)

【宮崎県大百科事典】の「ウンカ類」の項(鮫島徳造氏執筆)には次の通りみえる。

浮塵子(中略) 稲作の重要害虫としてセジロウンカ、トビイロウンカ、ヒメトビウンカの三種があり、いずれも体長約四〜五mm。方言サベエ、ヌカムシ(後略)

ここからみて「さばい」はウンカを意味する九州方言の借用語で、サ|ビ|【錆】の対応語ではない。

△ワ|ビ|【佗】——ワ|ブレ|【佗】 和備(万618) 和夫礼(万3759)

【混効験集】に下一段活用の例がみえる。

わ|べ|れ 何にても思事のたらずして悔事を云 箒木に俄にとわぶれと人もき、入すと有 佗ノ字

也(坤言語)

交替形がウ列音なのだから、琉球方言でも上二段活用を経て上二段活用であるべきはずだ。この語の場合は借用語として説明することはできない。おそらく、第一音節の母音がaだから進行同化をおこして、

* wabui > * wabai > * wabe

の変化が生じた結果、下二段活用となり、それが一段化したのだろう。

△カミ〔神〕——カムカゼ〔神風〕 加微〔記歌95〕 加牟加是〔記歌13〕

かみほとけ〔神仏〕(かたはなの碑おもての文) かみほとけ・ひのかみ〔火の神〕(浦添城の前

の碑おもての文) かみてた〔太陽神〕(オモロ一2) かみ〔神〕(オモロ二86) なりきよか

み〔成り人神〕(オモロ三88) 井口かみ〔井口神〕(仲里旧記1956) かみづ〔神酒〕(君南風由

来403)

「おもしろさうし」に次の言葉があらわれる。

かめん(九508) かめんこ(十二699)

この言葉は「混効験」にみえる。

がめん 神酒之事 がめん粉と 神酒作る粉之事神歌御双紙にみえたり(坤飲食)

外間守善氏は「がめん」について、「神酒。米をかみ、発酵させて作った神酒。(中略)「かめん」の

語源は未詳。」とする。「かめ」は釀^カミ「迦美し大神酒」(記歌48)に関係すると見るべきで、カミ

〔神〕の対応の例外例ではない。

△ミ〔身〕——ム〔身〕 微〔記歌94〕 田身山名此云大務(紀斉明)

わかみ〔我が身〕(オモロ五260) おみきやみ〔御身が身〕(オモロ七374)

このミと同根で、「実」の意味のミ「微」(記歌9)の対応形も、次のとおり、「み」で現れ、日本

祖語 *^ミに遡ることを裏付ける。

みとり〔実取〕(仲里旧記116) いしみれ〔石実入れ〕(君南風由来466)

Ⅱオ列乙類音と交替するイ列乙類音の対応例

△オキ〔起〕——オコシ〔起〕 於己(紀歌83) 於許之(万3962)

オキ〔煥〕(熾オキ) 観智院本名義抄) は「起^オキ火^ヒ(煥於支比) 新撰字鏡) のヒを省略したものだから、日本祖語 *^{Okoi}にさかのぼる。しかし「混効験集」にオキ〔煥〕の対応形が次のように

「おきれ」で現れ、音韻対応法則の例外となる。

おきれ 火を云 伊勢物語におきのぬて身をやくよりもかなしきは宮古嶋へのわかれ也けりと有

り また古歌に人をおもう心のおきと有(坤言語)

外間守善氏によれば、「火。日本古語の「おき(煥)」と同じで、今の方言ではウチリという。南伊豆

の方言にオキリというところがあるそうである。¹³⁾という。『日本国語大辞典』をひくと、「おきり〔名〕方言 炭火。」とあり、青森県南部地方・岩手県・福島県石城郡・茨城県・静岡県榛原郡・愛知県北設楽郡・愛媛県・鹿児島県の方言にみえ、さらに高知県では「おきれ」の語形であられるという。また、野原三義氏によれば、『大分県方言類集』に「オキリ火」¹⁴⁾、『宮崎方言辞典』に「おきり」¹⁵⁾。炭火の赤くおこったもの。②薪の炭火¹⁵⁾とみえるという。

九州をはじめ全国各地の方言に「おきり(れ)」が見えるので、琉球方言の「おきれ」は本土方言からの借用語と考えたい。

△キ〔木〕——コタチ〔木立〕 紀(紀歌41) 虚多智(紀歌105)

木をあらわす琉球方言は、『おもろさうし』中に「き」と「け」の二形がみえる。

☆「き」の例

あかき〔赤木〕(十535) あやき〔綾木〕(十三837) くすぬき〔楠〕(十538) くせき〔奇せ木〕

(十三837) しとき〔?〕(十五1083) すき〔杉〕(十五1082) ゆすき〔イスの木〕(十三822)

☆「け」の例

きやきやるけ〔輝る木〕(十三792) きよらけ〔清ら木〕(十一635) くねふげ〔九年母木〕(十

三981) くわけ〔桑木〕(十四991) こかねけ〔金木〕(二75) しらけ〔白木〕(十一635) よ

かるけ〔良かる木〕(十三792)

中本正智氏は二形の共存の原因を次のとおり、¹⁶⁾の母音変化にもとめる。

木を表す琉球語は、*karにさかのぼる。kaでないところが注目される。(中略)『おもろさうし』で——引用者〕「き」と「け」の両表記があるところから、当時既にkaに変化はしていたが、この音が「け」に由来するという意識があったのであろう。¹⁶⁾

一方、高橋俊三氏は次のとおり、二形の共存理由を母音変化にもとめることを否定する。

現在の方言では一般的に「木」がケに対応する音で発音されている点からすれば、「け」の方が琉球方言の古い形を写しているのである。(中略)「き」は名前の一部のようになったものに使われており、「け」は複合語の意識の強いものに使われている。ちなみに、『沖繩語辞典』より「……チ」「……ジ」という形の木の名をあげると

hukuzi (福木)、 kusunuci (楠木)、 kuruci (黒木)

hwiniuci (ヒノキ)

などである。従って、母韻変化による混同例とはならない。

氏は注として次のことを付け加える。

アカキは現在、akagiと言ひ、『おもろ』の表記と音韻上あわなひ。例外となる。¹⁷⁾

その後、高橋氏は「くすぬき」は本土方言からの借用語だろうという推測をしめした。¹⁸⁾

沖繩本島方言の「楠」をあらわす言葉が、借用語であることは、奄美方言と比較すれば証明できる。

奄美大島大和浜方言は「奄美方言分類辞典」⁽¹⁹⁾、沖縄本島北部の与那嶺方言は「沖縄今帰仁方言辞典」⁽²⁰⁾、沖縄本島南部の首里方言は「沖縄語辞典」より引用した。本論において、この三方言の資料は全てこの三辞典からの引用である。

| | 楠 | 木 | 毛 | 着物 | 月 |
|-------|--------------------------|-----|-----|--------|--------|
| 奈良朝中央 | ⁽²¹⁾ kusunōki | ki | ké | kinu | tuki |
| 奄美大和浜 | k'usunuk'i: | ki: | ki: | ki'in | tz'iki |
| 沖縄与那嶺 | k'ujunutgi | ki: | ki: | tʃinu: | ʃitʃi: |
| 沖縄首里 | kusunučji | ki: | ki: | ʃiŋ | tsiʃi |

奈良朝中央方言は音韻表記。他の三方言は音声表記にあらためて引用した（アクセントは省略）。クスノキのキにあたる部分が、大和浜方言では木と同音で本土方言のケに対応するのに対し、与那嶺・首里両方言では木と別音で本土方言のキに対応している。このことから、「くすぬき」が借用語であることは明白だ。

また「すき」も借用語である。多く指摘があるように、植物名にはウハギ・ナギ・ハギ・ヒサギ・ヒヒラギ・ヨモギ・ラギ等、乙類のギをふくむ語が多く、これらのギはキ「木」の連濁形だろうか

ら、スギのギも木と考えてよい。服部四郎氏は、杉が首里方言で [sɯgi] であることを根拠に、日本祖語形として *sugui をたて、日本祖語以前の *sugoi という形から、進行同化によって *sugoi > *sugui という変化があったとする⁽²²⁾。しかし、「沖縄大百科事典」で「スギ〔杉〕」の項（高江州重一氏執筆）をひくと、「沖縄でも古くから植栽され、スギの適地を△スギ敷▽と称してきた。自生のスギがあるといわれるが明確ではない。」とあり、中本正智氏の「琉球列島では杉を産出しない。スギという言葉も本土語をとり入れたものである。」⁽²³⁾という言葉に従うべきだ。

しかし、借用語であることが明かなこの二語を除けば、「き」にも美称辞の被さっている例（「あやき」「くせき」）があるので、高橋氏の言う、「き」は「名前の一部のようになったものに」、「け」は「複合語の意識の強いものに」使つてあるという区別は説得力にとほしい。

「あかき」の表記が首里方言と対応しないことは、高橋俊三氏が指摘していることだけでも、「おもしろさうし」で「あかき」の対語として現れる「ゆすき」も、「沖縄語辞典」には見えないものの「沖縄今帰仁方言辞典」中の与那嶺方言と対応しない。「おもしろさうし」中の木名を与那嶺方言・首里方言と比較すると、次の通りになる。

| | | | | | | |
|-----|-----------|--------|--------|----------|--------------|--------|
| | 楠 | 杉 | 赤木 | イヌの木 | 九年母木 | 桑木 |
| オセロ | くすぬき | すき | あかき | ゆすき | くねふげ | くわけ |
| 与那嶺 | kʷjunutʃi | ʃidʒi: | hakʷi | juʃi:gi: | kʷunibungʷi: | kʷwagi |
| 首里 | kusunutʃi | sidʒi | Zakagi | ———— | ———— | kwa:gi |

(与那嶺・首里両方言ともに音声表記。)

「あかき」と「ゆすき」の「き」は、現代方言からすれば、「け」と表記してあるべきである。何故にこの二語の表記が現代方言と対応しないのか、現在の私には説明できない。この問題が解決するまで、「き」と「け」の共存理由は不明とせざるをえない。

ともあれ、木を意味する「き」と「け」のうち、現代方言との対応からみて、「け」の方が琉球方言の古形を伝えていることは疑いない。

なお「混効験集」には次のとおり「くさぎな」と言う言葉がみえる。

かはしな 常山葉カサキの事 くさぎな共云 (乾飲食)

現代首里方言では [kusadʒina] といひ、「混効験集」の表記に対応する。常山葉にクサギのルビが振られていることから解するように、「本草綱目啓蒙」(一八〇三年)に

常山 蜀漆 コクサギ ノグサ城州鞍馬 クサギ羽州(中略)石州ニテクサギナト云フ

とみえる本土方言からの借用語だ。石州は現在の鳥根県西部。『日本国語大辞典』の「くさぎ」な【臭木葉】の項の方言欄には、岡山県苫田郡、広島県比婆郡、山口県厚狭郡、徳島・香川・愛媛・高知各県、鹿児島県の方言にあらわれると示してある。鹿児島県をはじめとして西日本各地の方言に存在するのだから、琉球方言に伝わることは十分に考え得る。

△ヨキ(避)——ヨコ(横) 与奇道(万1226) 余許(記歌42)

【混効験集】に対応形がみえる。

よける 物をよぎる事也 和歌に春風はなのあたりをよぎてふけと有(坤言語)

「よける」は下一段活用の形。本土方言の交替形がオ列乙類音の上二段活用動詞に対応する琉球方言の動詞は、*o:√*の音韻変化のため本来下二段活用であり、それが一段化を起したものである。琉球方言では本土方言よりも一足はやく、二段活用動詞が一段化していたことは、外間守善「——中世文献にあらわれた——琉球方言の動詞」(『国語学』41)参照。

本土方言にも次のとおり中世に下二段活用の「よけ」が存在する。

はなちれば道やはよけぬしがの山うたて木すゑをこゆるはるかせ(『六百番歌合』135)

しかし、この下二段活用は、平安時代になって発生した四段活用から転じたものである。26したがって、【混効験集】の「よける」は、あくまでも本土方言の上二段活用動詞の対応形とみるべきだ。

△オチ〔落〕——オトリ〔劣〕 澁知余岐(記歌81) 於止礼留(仏足石歌13)
 「久米仲里旧記」に対応形がみえる。

つろおてしめて(2014) 羽おてしめて(2015)
 仲原善忠「校注仲里旧記」に「つろはつるすなわち筋肉のこと、だれて動けなくなることはつるだれ、つるおてはつる落ち、つるだれに同じ。」とみえる。「おて」が連用形だと確認するには、「おて」を承けている「しめ」が何に接続するかを知ればよい。「しめて」は「おもしろさうし」にも現れ、「おもしろ辞典」には次の説明がある。

しめーて〔動連〕 させて。「しめ」は使役の助動詞「しむ」の連用形とみるみかた(奥里)もあるが、「しめ」の接続例は、あよまよい・おきなますー・きままよいー・へたなますー、ですべてであり、おきなます(沖膾)、へたなます(海膾)は体言、あよまよい(肝迷い)、きままよい(肝迷い)も動詞からの転成名詞であることに注目したい。つまり、「しめ」は体言に接続してその体言を動詞化する職能を持っている語である。ゆえに「しめ」は、「す」を基本形にするサ変動詞の変形であると考ええるほうが妥当である。現代方言でも、体言に接続してシミラ・シミリ・シミユン・シミュル・シミレー・シミレーと活用している。「て」は接続助詞。

△オヒ〔生〕——オホシ〔生〕 泌斐(記歌90) 於保佐牟(万4302)

「おもしろさうし」に次の言葉がみえる。

うへつく(十一624) おまつく(十二713) おいつく(廿一1482)

この言葉は解釈に諸説あるけれども、「生い着く」だとする波照間永吉氏の説を支持する。⁽²⁸⁾

オヒは日本祖語 **po:po:* に遡るのだから、**poi:* に対応する音節に「い」の表記があるのは例外となるように見える。

『おもしろさうし』では、イ列とエ列の仮名はほぼ規則的に書き分けてある中で、「い」「へ」「え」の仮名は混同が激しい(「え」の仮名は用いられない)ことは高橋俊三氏の研究に詳しい。ただ氏はそのことから、ア行・ハ行(特に語中)、ワ行以外では、イ列音とエ列音とは母音の区別があったと考えている。⁽²⁹⁾ しかし、服部四郎氏の考えたとおり、イ列とエ列の母音素はすでに*i*に合流している、両者は子音の口蓋化の有(イ列)無(エ列)で音韻的対立をしめしていた、⁽³⁰⁾と考えた方が「い」「へ」「え」の仮名の混同する理由を説明しやすい。つまり、語中に於ては、ア行と(既に母音音節化していた)ハ行・ワ行には、子音がないのだから、口蓋化の有無でイ列とエ列の区別をつけることなど出来ないからだ。ゆえに、この場合は結果的に音韻対応法則に反して、(第二音節に限って見れば)「おい」こそが最も音価に近い表記と言える。

△ヒ〔火〕——ホナカ〔火中〕 肥(記歌24) 本那迦(記歌24)

ひのかミ〔火の神〕「浦添城の前の碑おもての文」

奈良朝には、ホの音節に甲乙の対立はないものの、複合語においてホ〔火〕には、保乃保〔火の穂〕（新撰字鏡） 保乃計〔火の気〕（神楽歌75）

のごとく、格助詞のノが付いてナが付かない。格助詞ナはオ列乙類音の語には付くことがない。このことを根拠にして、服部四郎氏はホの音節に甲乙のあった時代には、ホ〔火〕は乙類だったと推定した。そして、氏は現代琉球諸方言と「語音翻訳」（一五〇一年）を資料に、火の日本祖語形としては**poi*が再構できず、音韻対応法則の例外となることを指摘した。

ホ〔火〕がかつて乙類だったとする服部氏の推定は支持すべきものと考えられる。したがって、金石文の「ひ」の表記は、現代琉球諸方言と同様に音韻対応法則の例外となる。この問題は第四章で詳しく考察する。

△ホロビ〔亡〕——ホロボシ〔亡〕 保呂夫止曾伊布（仏足石歌17） 保呂煩散牟（万3724）
ほるび（オモロ十七1187）

「おもしろ辞典」の「ほる・び」の項には、

〔亡び〕〔自動〕 ほろび。勢いをなくして。動詞「ほるぶ」「亡ぶ」の連用形。

とあり、「び」は対応の例外となる。

『沖縄語辞典』を引くと次のとおり見える。

huru = *bun*①（*bu* = *ban*、= *di*）①〔文〕滅びる。滅亡する。（後略）

この活用形式は、「*tu* = *bun*①（*bu* = *ban*、= *di*）飛ぶ。」と同じなので、本土文語のバ行四段活用に対応することがわかる。³²⁾

『仏足石歌』の用例は終止形だから、活用の種類を断定する使用にはなり得ないものの、本土方言において、四段活用のホロブの存在は認め難い。「大唐西域記長寛元年点」の

存亡マタクホロブ（こと）運に有アリ。³³⁾（こと）は中田祝夫氏の読み添え。

の例を『日本国語大辞典』は四段活用の例としているけれども、ルの書き落しと見るべきだ。

したがって、琉球方言における四段活用の「ほるび」の存在を説明するには、次にいくつか例を示すように、奈良朝のバ行上二段動詞の多くが平安時代以降に四段活用化した事実³⁴⁾を考慮する必要がある。

可奈之備（万4408）——かなしぶ心（古今集・序）

貴備（統紀12詔）——貴ブ志（今昔20・6）

喜備（統紀42詔）——よろこぶこと（土佐・二月六日）

琉球の人々はホロブを本土から借用する時、本土方言の他のバ行動詞が多く四段活用なので、類推によって四段活用として受入れたのではないだろうか。

△ヨロロビ〔喜〕——ヨロロボシ〔喜〕

喜備（統紀42詔） 与呂許保志（統紀46詔）

「かたはなの碑 おもての文」に

ねかひ事 かなひ、よろこひ、たのしむ

と「よろこひ」が見え、これも対応の例外となる。「沖繩語辞典」には次のとおりある。

juraku || bun[㊦] (III || ban, || u) ○ [文] (めでたいことを) よろこぶ。ことほぎ祝う。(後略)

この活用形はやはり本土のバ行四段活用に対応することを物語る(ホロビの項参照)。

この碑文が極めて和文色が強いことを併せ考え、「よろこひ」は、「よろこぶこと」(土佐・二月六日)等、平安時代にあらわれた四段活用動詞を借用したものとりたい。

△オイ[老]——オヨシ 渺伊(記歌92) 意余斯(万804)

まず、老人の意味の「おい人」(源氏・空蟬³⁵)に対応する語がみえる。

おひ人(かたはなの碑おもての文) おお人(浦添城の前の碑おもての文) おい人(オモロ五

268) おひ人(オモロ十二666)

「おもろさうし」には他に次の語がみえる。

おあるきやめ(六307) おあ(六308)

「大系本」は「老あるきやめ 老いるまで。『きやめ』は、までの意の助詞。」「老あ 『老あるきやめ』であろう。」とする。

日本祖語 *oi の *oi に対応する音節が「い」「ひ」「あ」で表記してあるのは、文献時代にはい

る前に、語中のヤ行のイ列音が /i/ へ変化していたためである。「おある」は、*oi / *oie の音韻変化によって本来はヤ行下二段に活用していた動詞が、 / *ie / /i/ の変化により、ア行上二段に転じたもので、「あ」は /i/ の表記。

同じく日本祖語 *oie に遡り、現代ではやはり上二段に活用する本土方言のオイは、上二段活用からの転である点に、琉球方言との違いがある。

△オリ[降]——オロシ[降] 安母理(万4254) 於呂之(万3603)

おれめしよわちへ[降りなされて] (石門の西のひのもの) をれめしよわちへ(かたはなの碑

おもての文) をれめしよわちへ(添継御門の南のひのもの) をれめしよわちへ(やらさもり

くすくの碑おもての文) をれめしよハちえ(浦添城の前の碑おもての文) おれて[降りて]

(オモロ一1) おれわちへ[降り給いて] (オモロ三88) おれて(仲里旧記134) おれよわ

ちへ[降り給いて] (君南南由来140)

*oioi / *oie の変化によって本来は下二段に活用していたこの動詞は、一段化を経てラ行四段活用動詞となっていたことが次の例からわかる。

おれら[降りよう 未然形] (オモロ十一622) おれるへし[降りるべし 終止形] (崇元寺之前

東之碑うらの文) おれるかす[降りる数 連体形] (オモロ十一598)

「おもろさうし」の中には、「大系本」が「降」と解釈している「おり」が幾つかある。その大部

分に対しては「おれ」が正しいという立場からの高橋俊三氏の考察⁽³⁶⁾があり、氏の見解を支持したい。本論では高橋氏がふれていないものについて考察する。

あかるおりかさ(一四一)

この言葉は41番オモロにのみ3例あらわれる。「大系本」は「揚がる降り笠」「降り笠」は神女名、「揚がる」は按司、神女、嶽などに冠する美称辞。」とする。41番オモロには他からの混入と見られている部分が二箇所にわたってある。このことは伝写の状態が良くないことを示すもので、「り」は「れ」の誤写とみて良いと思う。

おりつち(一四〇)

【大系本】は「降り頂 神が天降りする高い所。」とする。孤例であり、「り」は「れ」の誤写だろう。

他に「天降」の意味の「ており」(一三八)、拗音が生じた「てより」(三九一)が見える。未然形が「ておら」(二四〇)で現れることから、本土方言の上二段活用動詞オリを、連用形が同形のラ行四段活用として受け入れたとわかる。字音語「天」は琉球の古文獻では「てに」(オモロ一三二)と表記してあるのが普通である。この言葉では「て」となっているのは、オリと複合して琉球方言に入ったからだろう。

△シリ〔後〕——ウシロ〔後〕

斯理(記歌45) 宇斯呂(記歌42)

【大言海】の「う志ろ(名)〔後〕」の項が「身後ノ通音」とするのに従う。

後方を意味するシリへ「雪梨敵」(紀斉明)の対応形が「混効験集」にみえる。

しれい うしろの事 和詞にはしりへと云(坤言語)

【い】は日本祖語 **dia* (辺) に遡る **de* が、ハ行転呼の現象により母音音節の **e* を経て、*i* になったもの。

対応法則の例外となる「しり」という語形も見える。

玉しりきや(オモロ十514)

この言葉は次のとおり「混効験集」にみえる。

玉しりぎや 鞆シリカヒ(坤器材)

この語は「鞆シリガイ」(前田家本色葉字類抄)を借用したものである。

現代では「島尻」の字をあてる地名が「おもしろさうし」にみえる。

しまじり(一二) しまちり(廿一四七)

【大系本】によれば、12番オモロの方は「沖縄島南部の島尻郡」、141番オモロの方は「久米島仲里村の島尻」である。伊波普猷氏は「島の尻」という解釈は民間語源説で、「島治り」が原義だとする⁽³⁷⁾。

この伊波説にしたがう。また「混効験集」には次の言葉もみえる。

この語、外間守善氏は、「股肉。原注に『桃尻』の字を当ててあるが、『む、』は股、『しり』は肉である。³⁸⁾」とする。中本正智氏の『図説琉球語辞典』の「肉」の項をみると、現代琉球諸方言で肉をあらわす言葉は、本土方言のシシ(肉之々)和名抄)の対応形を用いていて、「しり」の表記に対応する語形はみえない。ちなみに『沖繩語辞典』には、「*si:ci*Ⓞ(名)肉。」と見える。このことから「しり」を肉とする外間氏の解釈には、疑問が残る。『混効験集』の記述では、意味が明確にはわからないので断定はできないけれど、本土方言「桃尻モ、ジリ」(易林本節用集)を借り入れたものと見た方がよいと思う。

Ⅲ 交替形不明のイ列乙類音の対応例

△トヂ〔閉〕——? 閉トニチ城の門」を(岩淵本願経四分律古点³⁹⁾)

【沖繩語辞典】には次のとおり見える。

tudi = *JUN*Ⓞ (他 = *ran*、*ti*) ①綴じる。 *coomin*。帳面をとじる。 ②縛る。 *nusudu kacimiti tuditeen*。どろぼうを捕えて縛ってある。

第二モーラー⁴⁰⁾は以下のとおり、奈良朝中央方言のヂではなくデに対応するので、日本祖語**doi*に遡ることがわかる。

| | 〔筋〕 | 〔蛇〕 | 〔魔〕 | 〔小網〕 |
|-------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 奈良朝中央 | <i>sudi</i> | <i>kadi</i> | <i>'ude</i> | <i>sade</i> |
| 首 里 | <i>sizi</i> | <i>kazi</i> | <i>Zudi</i> | <i>sadi</i> |

トの甲乙は、奈良朝の資料からは仮名書例がないため判断できない。しかし、いわゆる有坂・池上法則の第一則「甲類のオ列音と乙類のオ列音とは、同一結合単位内に共存することが無い。」⁴⁰⁾という現象が日本祖語にまで遡るものとすれば、トヂの祖語形は**todoi*となるから、トは乙類だったはずだ。**todoi*の傍証は、トドコホリ〔藩〕〔等騰己保里〕(万492)・トドメ〔留〕〔等籽米〕(万3627)のトドに求められよう。

**todoi*の琉球の古文獻における対応形は、「おもろ辞典」が「——として 原義は門^{みんぬ}、転じて関門の意となる。」とする

よもつとして〔世持つ門〕(オモロ三三〇)かみの世のとして〔上の世の門〕(オモロ七三七)の「——」に見ることができると思う。

△オヨビ〔指〕——? 指由比俗云於與比(和名抄)

おゑべやうちにかいどまかよる 指や内ニマカル也(混効験集・坤言語)

奈良朝に仮名書例がないため、ビの甲乙が不明だったけれども、「語音翻訳」ならびに奄美諸方言で、第三音節に対応する音が本土方言のべに対応することを根拠に、服部四郎氏はビが日本祖語 **poi* にさかのほり、奈良朝では乙類のビだったことを明かにした。⁽⁴¹⁾ 本論では奄美大島大和浜方言を例にとりて示す。

| | 指 | 鍋 | 箸 | 首 | 旅 |
|-------|----------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 奈良朝中央 | * <i>ojōbi</i> | <i>nabe</i> | <i>sabi</i> | <i>kubi</i> | <i>tabi</i> |
| 大和浜 | <i>zibi</i> | <i>nabi</i> | <i>sabi</i> | <i>kubi</i> | <i>ebi</i> |

『混効験集』の「おあへ」の「へ」も、オヨビのビが日本祖語 **poi* に遡ることを裏付ける。

指は現代首里方言では [zibi] だけれども、与那嶺方言では、[zubi] なので、「おあへ」は「zubi」を表記したものと見たい。エ列音が子音の非口蓋化でイ列音と対立していたこと、「あ」の仮名が「い」並びに「へ」と同音を表すことは、オビ〔生〕の項参照。また、√*o* の変化は『混効験集』編纂時には完了していたと考える。

服部氏はオヨビの日本祖語形として、祖語に **o* を立てて、「**ajūbai*」を再構する。ヨを **o* に遡るとするのはユビのユを考慮したためだろう。私見では、オヨビとユビの成立関係は、オヨビ√*o* ユビ√*u* の順序にあるとする前田富祺氏の説⁽⁴²⁾ を支持すべきものである。したがってオヨビの祖語形

は **ojōbai* と考える。

△シノビ〔忍〕——？ 志乃備(万394)

「おもろさうし」に次の言葉がみえる。

しのひあくみちよ(十三882)

『大系本』は「偲びあくみ人 偲び待ち望んでいる人。」とする。

山口佳紀氏の考えるところ、シノビのビはホロビ〔亡〕・ヨロコビ〔喜〕のビと同じ接尾辞⁽⁴³⁾ だろうから、シノビの日本祖語形は **sinobai* であるはずだ。従って「しのひ」の表記は対応の例外となるように見える。『沖繩語辞典』をひくと次のとおりある。

sinubi ① (名) ①〔文〕忍び。微行。②ひそかな恋。密通。また、あいびき。

sinu = *ban* ① (四 = *ban*, = *ai*) ① 忍ぶ。堪える。こらえる。(中略) ① ひそむ。かくれる。ひそかに行く。(男女が) かくれて通う。あいびきする。

この動詞の活用は本土方言のバ行四段活用に対応する(ホロビの項参照)。

奈良朝において、「忍耐する隠しつむ」意のバ行上二段活用動詞シノビは、「思慕する賞美する」意のハ行四段活用動詞シノビ「之努比」(万3849)と平安時代に入って交錯⁽⁴⁴⁾し、次のバ行四段活用動詞シノビを生む。

mucaxi no xinobaretareba (天草版平家物語)

「しのひ」はこのバ行四段活用動詞を借り入れたものだ。

△ミ〔巳〕——？ 身麻呂（大宝二年戸籍帳⁴⁵）

ひのとのミのへ〔丁の巳の日〕（添継御門の南のひのものん） つちのとのミのへ〔巳の巳の日〕

（浦添城の前の碑おもての文） みつのとこのみのへ〔癸の巳の日〕（オモロ十二支前書）

十二支の日付を表す言葉が、日本祖語に遡るとは考え難く、これらが本土方言「みの日」（源氏・須磨）を借用した言葉であることは間違いない。なお十二支の日付において、日が「へ」で現れる理由は、服部四郎氏に説がある⁴⁶。

△ミナ〔皆〕——？ 未那（紀歌）

「久米仲里旧記」に対応形がみえる。

みなわれて〔皆割れて〕（119）

服部四郎氏はミナを語幹ミと接尾辞ナとに分け、ミの交替形をモロ〔諸〕のモ（乙類相当）にもとめる。そして現代琉球方言と「語音翻訳」からは、日本祖語形に *mina が立てられないことを指摘した。そこで氏は日本祖語に * μ を想定することにより、祖語形として *mina を再構して、問題の解決をはかった⁴⁷。

服部氏の主張するとおり、ミナのミの交替形がモロのモならば、「久米仲里旧記」の「みな」も音韻対応法則の例外となる語形だ。

しかし、ミナのミとモロのモが同源であることは確実だろうか。イ列乙類音が語頭にくることは稀⁴⁸だから、ミナがミとナに分れることは間違いないものの、モロがモとロに分れるという根拠もない。このような不確実な推定をもとに論を組み立てるのは危険である。

したがって、拙論ではミナのミの交替形は不明としたまま、琉球方言をもとにミナの日本祖語形として *mina を再構する。

△キ〔居〕——？ 急居此云菟岐干（紀崇神）

「おもしろさうし」に対応形が現れる。

あちへ〔坐って〕（五⁵⁰） あより〔坐り居り〕（十一⁵⁶⁴）

この表記からは、日本祖語形は * μ を再構すべきだ。なお名嘉真三成氏が「宮古方言の上一段動詞の四段化現象」⁴⁹で、キ〔居〕をキ〔着〕、ミ〔見〕のごとく本来の上一段動詞として扱っているのは不適當（参照橋本進吉「上代における波行上二段活用に使」『上代語の研究』1951岩波書店）。

第四章 音韻対応法則の例外

前章での検討によって、琉球の古文献における、イ列乙類音の対応音の表記の概要は明かにし得たと思う。

本章では前章で保留にしておいた、日本祖語 * μ に遡るはずのヒ〔火〕の対応形が、「ひ」で現れ

る理由を考察することにする。

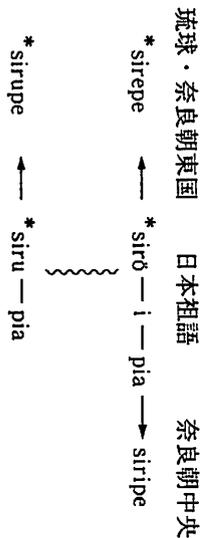
「ヒ〔火〕が音韻対応法則の例外となることは、服部四郎氏がすでに指摘していた。氏は日本祖語に母音調和を想定し、奈良朝中央方言のオ列乙類の母音に対応する祖語の母音として、 $/a/$ $[a]$ $u/a/$ $[e]$ のふたつを立てる。そして「ヒ〔火〕は日本祖語 $*pa$ に遡るのだとする。氏は『万葉集』の卷廿におさめられた4419番の武蔵国の防人歌にみえる「安之布」〔葦火〕のフを $*pa$ の傍証とする。⁽⁵⁰⁾

拙論においては、「ヒ〔火〕が音韻対応法則の例外となる理由について、服部氏とは別の説明が可能なることを示して、読者の判断を仰ぎたいと思う。

さて、「後方」を意味する奈良朝中央方言のシリへの対応形が『混効験集』に「しれい」で現れることは前章で述べた。実は「おもしろさうし」には、次にしめすとおり、「後方」の意味でもうひとつ別の語形がみえる。

しるいくら (一四98)

「おもしろ辞典」は「後の鞍。『しるい』はうしろの事、後方。」とする。この「しるい」の対応形が『万葉集』卷廿・4385番の下総国の防人歌に「志流散」としてみえる。このことから日本祖語に $*o$ と $*e$ の交替形があり、祖語から次の変化があったと考えることができると思う。



なお、『万葉集』卷廿4326番の遠江国の防人歌には、「志利弊」という語形がみえる。このシリへは、祖語に $*siru - pia$ という語形があつて、それに遡るものである可能性もあるものの、中央方言形の混入とみるのが無難だ。また、前章では地名「しまじり」は「島治り」が原義だとする伊波普猷の説に従ったけれど、もし「島の尻」が原義ならば、その「しり」は祖語形 $*siri$ に遡ることになる。

日本祖語に $*o$ と $*e$ の交替形があつたという推定は、次のとおり、奈良朝中央方言に $*o$ と $*e$ の交替形があることを裏付けとする。⁽⁵¹⁾

○ヨリ〔揺〕——ユラニ〔揺〕

與盤〔紀歌91〕 由良余〔万2065〕

○ヲコニ〔愚〕——ウコニ〔愚〕

袁許迹〔記歌44〕 于古珥〔紀歌36〕

○トモ(伴)——ツマ(妻)

登母(記歌14) 都麻(記歌3)

○オ・ロカニ(愚)——ウルケチ(癡騷鉤)

於呂可尔(万409) 于樓該賦(紀神代下)

このことから「火」の日本祖語形に *poi と *pui の二形があって、日本祖語から次の変化があったと考えることができよう。

琉球・奈良朝東国 日本祖語 奈良朝中央

*poi *pui
~~~~~                  ↓  
pi                      ↓ \*pui

「韋火」の意味の奈良朝東国方言「安之布」<sup>アノシフ</sup>のフが、日本祖語 \*poi の傍証となる。

以上をもって拙論を閉じる。イ列乙類音の琉球方言への対応の「法則」自体は、「動かない」と言つてよいと思う。「法則」の「例外」の原因究明がこれからの研究の課題となろう。

注

- (1) 「琉球方言と本土方言」(伊波普猷生誕百年記念会編「沖縄学の黎明」1976沖縄文化協会)
- (2) 「奈良朝中央語乙類の二母音と琉球方言」(琉大國語)2集・「宮古方言の上二段動詞の四段化現象」(沖縄文化研究)11
- (3) 「おもろ語辞書——沖縄の古辞書混効験集——」1972角川書店
- (4) 「仲原善忠全集」第二巻577頁1977沖縄タイムス社
- (5) 天治本
- (6) 仲原善忠・外間守善著197角川書店
- (7) 「おもろ辞典」凡例19頁
- (8) 「「おもろさうし」に於けるエ段音とイ段音」(沖縄国際大学文学部紀要国文学篇)6巻1号
- (9) 元和古活字本
- (10) 「琉球語源辞典の構想」(沖縄文化研究)6
- (11) 国立国語研究所編1963大蔵省印刷局
- (12) 注3文献
- (13) 注3文献
- (14) 「琉球方言と九州諸方言との比較(Ⅰ)」(沖縄国際大学文学部紀要国文学篇)8巻1号
- (15) 「琉球方言と九州諸方言との比較(Ⅱ)」(沖縄国際大学文学部紀要国文学篇)9巻1・2合併号

- (16) 『図説琉球語辞典「木」の項』1981力富書房
- (17) 注8文献
- (18) 「おもろさうし」の表記法と音韻(複製「尚家本おもろ御さうし」付録「解説おもろさうし」) 59頁
- (19) 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子共編1980笠間書院
- (20) 仲宗根政善著1983角川書店
- (21) 楠の仮名書の初出は『新撰字鏡』の「楠久須乃木」
- (22) 「日本祖語について・8」(『言語』7巻10号)
- (23) 「おもろ鑑賞・13」(『言語』14巻10号)
- (24) 杉本つとむ編著「小野蘭山 本草綱目啓蒙 本文・研究・索引」1974早稲田大学出版部
- (25) 小西甚一編著「新校六百番歌合」1976有精堂
- (26) 山口佳紀「古代日本語文法の成立の研究」363頁1985有精堂
- (27) 「仲原善忠全集」第三巻1978沖縄タイムス社208頁
- (28) 「久米島おもろの解釈」(沖縄久米島調査委員会編「沖縄久米島」606頁1982弘文堂)
- (29) 注8文献
- (30) 注10文献
- (31) 「日本祖語について・19」(『言語』8巻9号)
- (32) 「沖縄語辞典」58頁61頁参照
- (33) 中田祝夫「古点本の国語学的研究 訳文篇」581頁。1958大日本雄弁会講談社
- (34) 注26文献357頁参照
- (35) 池田亀鑑「源氏物語大成」中央公論社
- (36) 注8文献

- (37) 「島尻といへる名称」(『伊波普猷全集』第一巻1974平凡社)
- (38) 注3文献
- (39) 大坪併治「訓点語の研究」385頁1961風間書房
- (40) 有坂秀世「古代日本語に於ける音節結合の法則」(『国語音韻史の研究』)
- (41) 「日本祖語について・9」(『言語』7巻11号)
- (42) 「国語語彙史研究」539頁1985明治書院
- (43) 注26文献473頁
- (44) 大野晋「柿本人磨訓話断片(四)」(『国語と国文学』26巻10号)
- (45) 「大日本古文学」31頁1982東京大学出版会
- (46) 「音韻法則の例外——琉球文化史への一寄与——」(『日本学士院紀要』36巻2号)
- (47) 「日本祖語について・15」(『言語』8巻5号)
- (48) 大野晋「音韻の変遷(1)」(『岩波講座日本語』5・1977岩波書店)
- (49) 注2参照
- (50) 注31文献
- (51) 注26文献323頁

引用文は新字体にあらためた。